高知女子大学看護学会誌　VOL.40, NO.1, pp169～170　2014

第40回　高知女子大学看護学会報告

高知女子大学看護学会企画委員長　畦　地　博　子

メインテーマ：看護を拓くナラティブ・アプローチ

第40回高知女子大学看護学会が、去る平成26年７月12日（土）に、高知県立大学池キャンパスで開催された。参加人数は221名と、昨年を上回り、多数の皆様の参加をえて、活気ある学術集会となった。テーマは、昨年に引き続き「看護を拓くナラティブ・アプローチ」である。このテーマのもと、午前は、ナラティブを用いた看護実践や教育の研究を、先駆的に取り組まれている遠藤淑美先生へ、「実践に活かすナラティブ・アプローチ」というテーマでご講演をお願いした。午後からは、７つのワークショップを開催した。ナラティブ・アプローチがどのように看護を育むのか、語り・語り継ぐことをとおし、さらなる看護学の発展を目指した学会となった。

学会長挨拶

講演に先立ち、野嶋佐由美学会長から、参加者や講師・話題提供者の方々に対し、学会への参加に感謝の意が伝えられた。

また、学会テーマの趣旨を述べられると同時に、午前の遠藤淑美先生の講演、午後のワークショップについて紹介され、参加者に対して、本学術集会を通して、多様な状況でのナラティブの活かし方を探求し、関わっている現象を今一度ナラティブの視点から再接近する機会となって欲しいことが述べられた。

語り方も時代と共に変化している今日、学会もまた、フェイスブックなどソーシャルメディアにおける交流を通し、新しい方法で看護学を語る言葉と、語る力の発展を目指していきたいと述べられ、今後も学会に参画していただきながら、かわらないご指導とご協力をお願いしたいと挨拶された。

来賓の挨拶

高知県立大学学長　南裕子氏、高知県立大学看護学部同窓会会長　梶原和歌氏、そして、高知県看護協会会長　宮井千恵氏（副会長　藤田佐和氏代読）より、第40回高知女子大学看護学会開催のお祝いと今後の学会の発展への期待が述べられた。

講演会：　10:20〜12:00

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻の遠藤淑美先生により、「実践で活かすナラティブ・アプローチ」というテーマで、約90分程度の講演が行われた。講演の内容については、本学会誌をご参照いただきたい。

遠藤先生ご自身の体験をふまえ語られた、「ナラティブが語る者と聴く者の間に現実を創り、その現実はナラティブによって書き換えられる」という現象は、多くの方に振り返りや気づきをもたらす機会となった。

参加者の皆さまからは、「語るということを意識的に行うことで、臨床で看護師の育成をしていくときに看護師が自己に気づくことができるのかもしれない。自分自身の気づきを得られた」、「語ることが看護に必要であること、本質であることが再認識でき迷いが少しはれた」、「看護師のもつ本来の技能を磨く必要があると思った」、「教員の立場で学生とかかわるときも参考になる話でした。学生に対して‘こんな看護師になってほしい’とか‘この子らしく育ってほしい’という思いを大切に学生自身の語りを引き出せるような問いかけのできる教員でありたいと思った」などの意見がよせられていた。

ワークショップ：　13:30〜15:30

今年は７つのワークショップ、「ナラティブ・アプローチを活用したシミュレーションデザイン」、「現任教育に活かすナラティブ・アプローチ」、「慢性の病いの語りの意味と可能性を探る」、「ナラティブを引き出す聴く技術」、「研究：語りを分析する」、「保健活動の伝承」、「病院と地域をつなぐ　〜今を語り合う」を開催し、参加者がナラティブ・アプローチを用いた実践や研究を振り返り、今後の展開について語り合う機会となった。各ワークショップの内容については、本学会誌をご参照いただきたい。

各ワークショップには、20人前後の方が集まり、それぞれのテーマで、活発なディスカッションが展開された。参加者の皆さまからは、「刺激になった」、「わかりやすく実践的であった。着実に目の前のことから始めていきたい」、「自分のアンテナに触れた語りのみ分析していたのではいけないと感じた。」、「ナラティブから人材育成まで深い語り合いができた」、「連携・協働の真の意味が伝えられる活発な意見交換ができた」などの意見がよせられていた。